

虫送り

八月、小松の農村部では、各地で虫送り行事が、村中総出で賑やかに行わ



祭壇にまつられる実盛の甲(多太神社)

れた。稲作にとって、夏場発生するウンカやイナゴなどの害虫は、生育をさまたげる大敵であった。各村々では、この害虫を防ぐため、大きな締め胴太鼓を先頭に、麦ワラや麻木で作ったタスマツなどをかざし、田の畔道あぜみちを行列をつくって練り歩いた。

この虫送り行事には、伝説があり、寿永二年(一一八三)、篠原(現在の加賀市)の地での合戦の際、落命した平家の老将、斎藤別当実盛公さいとうべっとうみねもりに因ちなんでい。実盛は敵方武将と一騎打ちの際、乗っていた馬が、稲株に足をとられ、落馬し、結果首を打たれた。打たれる寸前、実盛は、稲株を呪い、「死んだ後は、怨霊となり、稲にとり憑ついてやる」といい残して死んだ。その後、実盛の霊は、稲にとり憑く害虫となった



平成5年(1993)の回向祭(小松市の前川) 舟を使って多太神社へ向かう遊行上人(右から3人目)

と伝えられる。

かつて福の宮町では、毎年七月二十四日の虫送りの際、実盛の藁人形わらを作

り、これを行列の先頭に実盛送りと称し、実盛の霊を鎮め送ったという。第二次大戦後、この行

事は一時途絶えたが、昭和四十四年（一九六九）に復活され盛大に行われてきた。

が盛大に行われている。また時宗じしゅうの総本山遊行寺ゆぎょうじの第十四代太空中上人たいくうちゅうが巡錫の折、篠原の地で実盛の霊にあり、成仏させた伝えがあり、以後、歴代の遊行上人の北陸巡錫の際には、「兜え回え向」として多太神社に必ず参詣するようになり、今に続いている。（高桑守史）



昭和45年(1970)7月に行われた実盛送りの行列 実盛のわら人形をかついて練り歩いた

しかし平成九年（一九九七）以後、行事は取り止めになっている。

実盛の着用した兜かぶとは、現在、多太神社に奉納されている。多太神社では、七月二十四日に、実盛の事蹟を偲び「かぶと祭り」



かつて行われた「実盛送り」での虫送り太鼓(TV番組「実盛の怨霊祭り 虫送りにみる祖霊観」より)